大阪青山大学看護学ジャーナル　2巻　53－57
Nursing Journal of Osaka Aoyama University. 2018,Vol.2, 53－57.

実践報告

新入生を対象とした禁煙指導の効果について
～看護学生を対象とした4年間の追跡調査～

小石真子[1)]，矢野恵子[2)]，藤田智恵子[3)]，大城知恵[4)]

[1)]大阪青山大学健康科学部看護学科，[2)]金沢医科大学，

[3)]明治国際医療大学，[4)]聖マリア学院大学

The effect of the no smoking guidance on freshmen
～4 years follow-up survey for nursing students～

Masako Koishi[1)]，Keiko Yano[2)]，
Chieko Fujita[3)]，Tomoe Oki[4)]

[1)]School of Nursing，Faculty of Health Science，Osaka Aoyama University
[2)]Kanazawa Medical University
[3)]Meiji University of Integrative Medicine
[4)]St. Mary's College

要　旨

看護学部入学生に対して、学年アドバイザー教員が中心となり1年次から4年次にわたり継続的に禁煙指導・啓蒙活動指導をおこなった。対象は2012年度入学生77人、期間は2012年6月～2016年2月である。卒業前アンケート回収数は29であった。1.「喫煙者」は、卒業前0人であった。2.「禁煙教育は個人の喫煙防止に効果あり」に対して、肯定的回答23人(79.3%)であった。3.「大学構内は禁煙とすべき」に対して、肯定的回答23人(79.3%)であった。4.「医療従事者の禁煙」に対して、肯定的回答17人(58.6%)であった。加納式社会的ニコチン依存度質問表（KTSND）の平均値の年次推移では、1年次の指導前10.3(±5.6)であり、禁煙指導後7.6(±6.0)となり有意に低下した。しかし、2年次は11.8(±6.0)、3年次は11.9(±6.2)であったため、再度禁煙指導を実施した。4年次前期は13.3(±5.9)と上昇し、1年次指導後よりも有意に高くなっていた。再指導の後、卒業前には10.2(±4.8)と低下した。

キーワード：禁煙指導、看護学生、加濃式社会的ニコチン依存度調査票（KTSND）

Ⅰ．緒言

2003年5月1日に健康増進法が施行され、受動喫煙の防止は学校や病院の努力義務となった。喫煙率については2006年の国民生活基礎調査[1)]では男性39.9%、女性10.0%に対して、日本看護協会の看護職の実態調査報告書[2)]によると、男性54.2%、女性18.5%と国民の喫煙率を上回っているため、さらなる喫煙看護者に対する禁煙支援や看護学生の禁煙･防煙教育に積極的な取り組みが求められている。

但し、薬学部生を対象とした先行研究では、入学前の禁煙教育受講の有無で喫煙に関する意識に有意

差はみられず、繰り返し情報提供や教育機会を設ける必要性について検討されていた[3]。

そこで、本研究では学年アドバイザーは、学生の卒業時の目標「学年全員の禁煙（卒煙）」、4 年次の目標「看護専門職の自覚を持ちクラス内に喫煙者がいない。禁煙を支援できる環境をつくる。」を掲げ、禁煙教育の効果を維持するために学生に継続した禁煙指導を行い、評価することを目的とした。

Ⅱ．方法

１．対象：A 大学看護学部 2012 年度入学生。学生の在籍者数は 1 年次 77 人、2 年次 64 人、3 年次・4 年次は 55 人であった。

２．調査期間：2012 年 6 月～2016 年 2 月。調査時期は、1 年次・2 年次 6 月、3 年次は 7 月、4 年次は前期の臨地実習終了時と卒業前クラスアワー時(2 月)に自記式質問紙の調査を実施した。

３．禁煙教育内容：①1 年次の外部講師（保健所健康支援担当保健師）による講義内容：看護職とタバコや禁煙サポートについて、②禁煙啓蒙活動担当係の学生を中心とした活動：学校祭や成人式にて禁煙啓発のティッシュの配布（図 1)、毎月 22 日の“禁煙の日”のキャンパス内等でのちらしやポスターによる禁煙啓蒙活動をサポート、③3 年次の学年アドバイザーによる具体的事例など家族を含めた禁煙に関する講義、④卒業前の外部講師(保健所健康支援担当保健師)による再教育と学年アドバイザーの禁煙啓蒙活動担当係を中心とした活動の振り返りを行った。

４．調査内容：各学年において、性別、禁煙教育の効果、構内禁煙・医療従事者の禁煙の必要性、加納式社会的ニコチン依存度質問表(Kano Test for Social Nicotine Dependence、以下 KTSND)とし、3 年次以降は、喫煙の有無と一日の喫煙本数を加えた。KTSND は、加濃、吉井らにより研究開発され、10 問 30 点満点(表 1)で、「喫煙効果の過大評価および喫煙や受動喫煙の否定」を定量評価するものであり、得点が高いほど、喫煙に対する許容程度が高いと評価されている[4),5)]。

５．分析：4 年次前期と卒業前とを比較する喫煙に関する意識の項目は､「そう思う」と「ややそう思う」を合わせて「肯定的回答」として、また、「あまりそう思わない」と「そう思わない」を合わせて「否定的回答」として χ^2 検定を行った。KTSND 平均値について各学年や性別による比較をした。平均値の比較には t 検定を用いた。解析には解析ソフト（PASW Statistics 18、IBM 社）を使用し有意水準を 5%未満とした。

６．倫理的配慮：学生に調査の主旨と内容や倫理的配慮を口頭と紙面で説明し、無記名式のアンケートを配布し、回収を持って研究協力への同意とみなした。なお、本研究は明治国際医療大学の研究倫理委員会の承諾を得て行った（承認番号 24-10-4)。

図１　学生が考案したティッシュに添えるちらし

Ⅲ．結果

アンケート回収数は、1 年次 48（男性 3 人、女性 40 人、不明 1 人）、2 年次 62（男性 14 人、女性 43 人、不明 5 人）、3 年次 54（男性 13 人、女性 38 人、不明 3 人）、4 年次前期 47（男性 10 人、女性 34 人、不明 3 人）、卒業前 29（男性 6 人・女性 22 人・不明 1 人）であった。

１．喫煙に関して

質問「タバコを吸いますか」に対して、「はい」は 3 年次 4 人、4 年次前期 5 人、卒業前 0 人であった。

２．タバコに対する意識について

1) **禁煙教育の効果**：質問「禁煙教育は個人の喫煙防止に効果があると思いますか」に対して、4 年次前期の肯定的回答 33 人(70.2%)、否定的回答 14 人(29.8%)であった。卒業前は肯定的回答 23 人(79.3%)、否定的回答 6 人(20.7%)であった(表 2)。

2) **大学構内の禁煙**：質問「大学構内は禁煙にすべきと思いますか」に対して、4 年次前期の肯定的回答 30 人(63.8%)、否定的回答 17 人(36.1%)であった。卒業前は肯定的回答 23 人(79.3%)、否定的回答 6 人(20.7%)であった（表 2)。

3) **医療従事者の禁煙**：質問「医療従事者はタバコを吸ってはいけないと思いますか」に対して、4 年次の肯定的回答 24 人(51.1%)、否定的回答 23 人(48.9%)であった。卒業前は肯定的回答 17 人(58.6%)、否定的回答 12 人(41.3%)であった（表 2）。

３．学年ごとの KTSND 平均得点の推移

1 年次の禁煙講義前は 10.3（±5.6）であったが、講義後 7.6（±6.0）となり有意に低下した($p<0.001$)。しかし、2 年次は 11.8（±6.0）、3 年次は 11.9（±6.2）であり、4 年次前期では 13.3(±5.9)と上昇した。2 年次平均値、3 年次平均値と 4 年次前期平均値で有意差はなかったが、卒業前は 10.2(±4.8) と有意に低下した($p<0.05$)。また、卒業前の平均値と 1 年次講義後の平均値の有意差はなかった(図 2)。

なお、性別の KTSND の平均得点の推移では、卒業前の男子学生の KTSND の平均値は 13.1(±4.2)、女子学生の KTSND の平均値は 9.5(±4.6)と有意差はなかった($p>0.05$)が、全体的に男子学生の方が高い傾向を示した(図 3)。

Ⅳ．考察

卒業前は、禁煙教育の効果の大学構内の禁煙に対しては約 8 割の学生が肯定的な回答をしていた。し

表１　加納式社会的ニコチン依存質問票

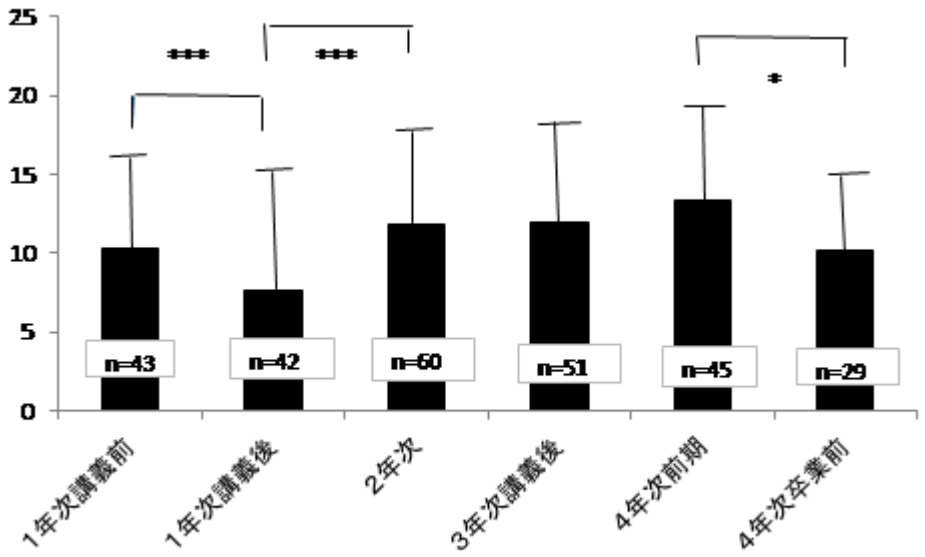
1.タバコを吸うこと自体が病気である。
(0) そう思う　(1) ややそう思う　(2) あまりそう思わない　(3)そう思わない
2.喫煙には文化がある。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
3.タバコは嗜好品（しこう品：味や刺激を楽しむ品）である。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
4喫煙する生活様式も尊重されてよい。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
5.喫煙によって人生が豊かになる人もいる。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
6.タバコには効用（からだや精神に良い作用）がある。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
7.タバコはストレスを解消する作用がある。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
8.タバコは喫煙者の頭の働きを高める。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
9.医者はタバコの害を騒ぎすぎる。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
10.灰皿の置かれている場所は、喫煙できる場所である。
(3) そう思う　(2) ややそう思う　(1) あまりそう思わない　(0)そう思わない
カッコ内は配点

表２　４年次のタバコに対する意識の肯定的回答者数の比較

質問項目	肯定的回答者		統計解析
	4年次前期	卒業前	
禁煙教育は個人の喫煙防止に効果がある	33人(70.2%)	23人(79.3%)	n.s
大学構内は禁煙にすべき	30人(63.8%)	23人(79.3%)	n.s
医療従事者はたばこを吸ってはいけない	24人(51.1%)	17人(58.6%)	n.s

質問に対して「そう思う」と「ややそう思う」と回答したものを肯定的回答者とした。
括弧内は有効回答者数に対する割合を示す。
4年次前期と卒業前の肯定的回答者数の比較は χ^2検定を用いた。

n.s:有意差なし



*:p<0.05, ***<0.001　図２　KTSND 平均値の年次推移

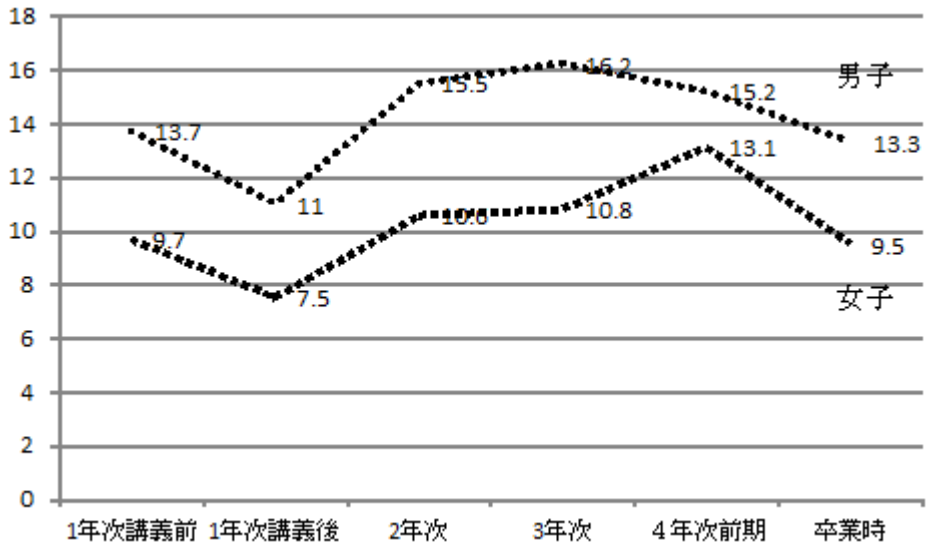


図３　男子学生・女子学生の KTSND 平均得点の推移

かし、医療従事者の禁煙に対しての肯定的な回答は6割弱であった。禁煙教育の効果は感じているものの、栗岡ら6)の看護専門学校の調査でも「タバコを吸うのはその人の自由」と考えの学生が多くあり、看護者としての規範を意識できる指導が必要と考える。また、環境面では、北田ら7)の建物内分煙は学部入学後の喫煙率上昇に関連しているとの報告もあり、大学敷地内の全面禁煙化といった積極的な環境整備や体制づくりを行うことも必要と考える。

次にKTSNDの平均値の年次推移では1年次の講義前に比べ、講義後にKTSND平均値は低下した8)が、2年次KTSND平均値は上昇し、3年次は授業の中で禁煙指導を取り入れたため、上昇は少なかったと考える。しかし、1年間の領域実習後の4年次前期では、KTSND平均値は上昇した。学生は実習期間中に患者および家族に接しているが、生活環境で受動喫煙の機会が多く、喫煙を許容する意識が高くなった可能性もある。そして、4年次前期の調査結果をふまえて、卒業前に禁煙教育を行うことで、KTSND平均値が低下したと考える。

最後に卒業前の調査では、4年次前期に比べクラスアワーの参加者がやや少なく、回答者は対象者の52.7%であったものの、卒業時の目標である学年全員の禁煙および非喫煙は出席した学生に関しては、達成できたと考える。それには、1年次から学年アドバイザーが地域のタバコ対策を推進している保健所の健康支援担当から協力を得て、複数回の禁煙指導を行ったことや禁煙啓蒙活動係の学生を中心とした主体的な禁煙啓発活動により、喫煙に対する許容を防ぐ効果が一時的にみられたと考える。

今回の研究は、複数回の学年アドバイザーや保健師の指導、そして、禁煙啓蒙活動係の学生を中心とした主体的な禁煙啓発活動から禁煙指導の効果をとらえたが、学生の生活環境や実習における禁煙指導の実施などの要因をふまえた検討できなかった。

Ⅴ．結論

入学年次から学年アドバイザーの継続的な禁煙指導や学生による生活安全委員の禁煙啓発活動は、喫煙に対する許容を防ぐことが示唆された。

なお、本論文の結果は一部、第45回日本看護学会ヘルスプロモーション学術集会（2014年8月熊本）、第46回日本看護学会看護教育学術集会（2015年8月奈良）、第47回日本看護学会ヘルスプロモーション学術集会（2016年11月三重）にて発表した。なお、本報告に開示すべきCOI状態はない。

謝　辞

禁煙指導にご協力いただきました京都府南丹保健所の健康支援対策担当の保健師の皆様に感謝申し上げます。

文　献

1) 厚生労働省：平成 18 年国民健康・栄養調査結果の概要 http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/04/h0430-2a.html(2012.4.20).
2) 日本看護協会：看護職のタバコの実態調査 http://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/2007/tabakohokoku.pdf(2012.4.20).
3) 齋藤百枝美，渡邊真知子，渡部多真紀他：喫煙に対する薬学生の意識調査, 日本禁煙学会雑誌, 2010, 5(6), 158-164.
4) Yoshii C, Kano M, Isomura T et al : An innovative questionnaire examining psychological nicotine dependence, “The kano test for social nicotine dependence(KTNSD)” JUOEH, 2006, 28, 45-55.
5) 吉井千春：ニコチン依存度テストの現在と未来(TDS,FTND,KYSND), 治療, 2006, 88, 2572-2575.
6) 栗岡成人，繁田正子，田中善紹：看護学生の喫煙状況とたばこに対する意識,京都医学界雑誌, 2010, 55, 33-40.
7) 北田雅子，天貝賢二，大浦麻絵他：喫煙未経験者の加濃式社会的ニコチン依存度(KTSND)ならびに喫煙規制に対する意識が将来の喫煙行動に与える影響―大学生を対象とした追跡調査より―, 日本禁煙学会雑誌, 2011, 6(6), 98-107.
8) 小石真子，矢野惠子，藤田智恵子他：看護学部１年生に対する禁煙指導の効果～禁煙継続指導の１年目の報告～, 明治国際医療大学誌, 2013, 9, 19-22.